
理想の人

フォルティッシモ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

理想の人

【Nコード】

N7139H

【作者名】

フォルティッシモ

【あらすじ】

高校二年生でバスケット部の主人公は気になる女子がいる様子。悩みに悩んだ主人公は遂に彼女に思いを伝えることを決意する。果たして思いはかなうのか。

（前書き）

処女作ですので展開、文法共にめちゃくちゃだと思います。寛大な
心で読んでくださると幸いです。

最近部活に身が入らない。授業中もぼんやりしていることが多くなった気がする。昨日に至っては得意の英語でも誤訳を連発し、怒られるどころか心配される始末だ。

そんな時、彼女について目がいつてしまっ自分気がついた。まったく自分は一体何を考えているのだろう。自分の考えていることに嫌気が差す。

なんでもそつなくこなす人間なら少し探せばいる。しかし彼女はそんな人間とは次元が違った。

まず何よりスポーツ。球技、水泳、陸上競技、何をやっても彼女は誰よりもうまくやって見せた。正直な話、彼女ならば男子の部活であつてもどこに入ろうが即レギュラーだろう。バスケの時間に彼女の鮮やかなドリブルを見せ付けられたときは嫉妬を通り越して羨望すら抱いたものだ。バスケ部員の意地など捨て、彼女のプレイを試合中もずっと目で追っていた。

そして勉強。こちらはスポーツほど抜きん出ているわけではないが、それでも学年五番以内は確実にキープしている。苦手教科であつても彼女の順位が十位を下回つたところを見たことがない。

最後に人格。これが彼女に惹かれる最も大きな理由だ。これだけの長所をもちながらも彼女は決して驕ることがない。バスケでもチームのメンバーが楽しめるように自分はサポートに徹するのだ。日常生活においても他人を立てることを怠らず、それでいて卑屈になることもない。

もつとも少々天然なところはあるが、それがますます彼女の魅力を

引き立てていた。初めはその才能に嫉妬して彼女に陰悪な態度を示す人間もいたが、彼女は自分に突っかかってくる人間でさえ数分話だけで友達に変えて見せた。彼女には人を惹きつける天性の才能があるのだ。もっとも自分も惹きつけられた人間の一人なのだが。とにかく、今の自分にとって彼女はまさに理想の人間だった。

彼女に自分の願いを伝えるべきか、否か。ここ最近不調なのはそればかり考えているからだ。そんなことは分かっていた。しかし、答えの分かりきった質問をするのも馬鹿らしい。ただでさえ口下手なのに彼女を説得なんてどう考えても不可能だ。なにより突然そんなことをいわれては彼女も迷惑だろう。

そんなことをうじうじ考えているうちに、あっという間に時は過ぎた。もう限界だ。これ以上引き伸ばすわけにはいかない。どうせ駄目でも今と何も変わらないじゃないか。

悩み始めて数週間、無理やりに自分を納得させ、彼女を放課後呼び出すことに成功した。場所は体育館の裏。彼女は二つ返事でOKしてくれた。これで逃げ隠れはできない。どっちに転んでも、いやまあどっちに転ぶかは分かっているのだが、一応これで決着がつく。担任が終礼の挨拶をするや否や、礼をするのももどかく待ち合わせ場所へ駆け出した。

先に待っているのも気恥ずかしかったので、少し離れた場所に隠れていた。彼女は昇降口から友人と談笑しながら出てきた。交友範囲が広い彼女は男子からもよく声をかけられている。場所にほとんど人が来ない体育館裏を指定したのは正解だったようだ。人に聞かれて抜け駆けした奴だと後ろ指さされるのも嫌なものだし。

彼女がここに来てから少し時間がたった。今のところ人が来る様

子はないようだ。よし。

「ごめん、待った？」

「ううん、今来たところ。ちょっと友達と話してたものだから。それで、話って何なの？」

この会話だけ見ればデートの待ち合わせみたいだな、とふと思った。しかし彼女は友人と待ち合わせでもしているのだろう、あまり長話はしたくなさそうに見える。正直もう少したわいもないことを喋っていたかったのだが。

「えっと。あー……………これから1年間、一緒に夢を追いかけてくれませんか!？」

「はい？ えっと、それってどういう……………」

しまった。てんばって意味不明なことを口走ってしまった。そうはいってももう後悔しても遅い。こうなったら一気にたたみかけるのみだ。

「いや、君がいろんな人から誘いを受けてそれを全部断ってるのは知ってるんだけどね。それでもどうしてもあきらめきれないんだ。君と一緒に頑張れるかなって思うんだよ。魅力的な性格も、バスケの美しいドリブルも、本当に理想の人そのものなんだ。君に会ったのは運命だったんだと思えるくらいに。」

「えっと、その……………」

ああ駄目だ、余計わけの分からないことをまくし立てた気がする。運命なんていつの時代だよ。なぜか彼女真っ赤になっちゃってるし。何とか取り繕わないと……………!

「勝手なことをいつているのは分かっているんだ。いきなりこんなこと言っても戸惑うだろうけど……………」

「だから、その……………」

「いやその、別に無理にいつていつてるわけじゃなくてね。今まで断ってきたのだって事情があるんだろうし……………」

「あの！ 私……………実は付き合ってる人がいるの!」

「へ?」

「まだ誰にも言っていないんだけど、私ずっと片思いの人がいて……この二年間ずっと悩んできたんだけど、この間決心して告白したの。彼もわたしのことが好きだったっていつてくれたから……これまで悩んでいた月日の分もこれから一緒にすごそうって約束したんです。」

ああ、こうなることは分かっていたけどいざ正面から言われると脱力感が……

まさか彼女に彼氏がいるとは思わなかった。そういえば、彼女野球部のマネージャーやってたっけ。部活の誘いをことごとく蹴っていたのはそういうことだったか。

「ああ、そうだったのか……それならしょうがないね。二人の邪魔はしたくないし。ごめんね、一方的にまくし立てたりして。」

「ううん、こっちこそごめんなさい。あなたの気持ちにこたえてあげられなくて。あの……これからも今までどおり友達でいてくれるよね？」

「え？ いやそれはこっちのセリフだよ。強引なこと言って悪かったと思ってる。今言ったことは全部忘れていいから。彼氏と仲良くやんなよ。」

ニヤリと笑いかけて見せると彼女はつられて笑ってくれた。やっぱり彼女は笑顔の方が似合うな。

「ありがとう。じゃあ、私約束があるから。」

「はいはい。頑張ってるね。応援してるから。」

苦笑いしながら手を振ると彼女も手を振りながら走っていった。やれやれ。

「はいあ。結局部長は私がやるっきゃないかあ。彼女、適任だと思っただけだなあ。あーかったるい。」

思わず独り言がもれてしまう。一ついいわけをしておく、私の高校における部長というのは生半可な覚悟でなれるものではないのだ。特にバスケット部は。練習試合は申し込みから全て部長の役目だし、道具が一つでもなくなっていれば全部部長の責任だ。中でも一番嫌なのは部長は強制的にクラブチームの練習に参加させられるということだ。正直言ってそこは私なんかがついていけるレベルじゃない。男っぽくて頼りになるとか何とかいって自分を推薦しやがったチームメイトが心底恨めしい。他に適任者を見つけてみせると意気込んでみたものの、やっぱりそううまくはいかないか。なってもらったらなってもらったで罪悪感があるだろうし。

そういえば、彼女妙に顔が赤かったような気がするな。何か勘違いしてるような…… 杞憂だろうか？

「ま、なんにせよ決まっちゃったからにはしよーがない。いっちょ気合入れていきますか！ あ、あの薄情者どもに地獄の特訓メニュー課してやる！」

なんののかんの言っても自分にはリーダーが向いてるのかもな、と今になって感じた。

（後書き）

非常に分かりにくい話であることは自覚していますので少々。
主人公は女です。それで、「彼女」は女の子に告白されたと思って
おたおたしてるわけですね。本当は勧誘してるだけなんです。
こんな勧誘するやついねーよ！ という突っ込みは覚悟のうえです。
もっとうまい表現を思い付いた方は教えてくださるとうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7139h/>

理想の人

2010年10月28日03時07分発行